

The Whisper from Amherst



エミリィのささやき

新しい年が始まりました。みなさんはどのようなお正月を過ごされたでしょうか。年賀状に印刷された決まり文句にひとこと書き加えるのでさえ、あれこれ思い悩むのですが、エミリィは生涯をとおして実に多くの手紙を書きました。彼女はよく手紙の文中に詩を入れることがありましたが、手紙文と少しも違和感がなかったようです。ときには贈り物の花やお菓子に詩を添えたこともありました。しかしそれらは全作品のほんの1部で、生涯に書いた1775篇のほとんどが、あて先のない読者への「手紙」だったとも言われています。



'This is my letter to the World'

This is my letter to the World
That never wrote to Me -
The simple News that Nature told -
With tender Majesty

Her Message is committed
To Hands I cannot see -
For love of Her-Sweet-countrymen-
Judge tenderly - of Me

これは手紙をいただいたこともない
読者の方に送るわたしの手紙です
やさしく 威厳をもって
自然が語りかけてくれた素朴な便りです

彼女のメッセージを
会うこともないあなたの手に委ねます
彼女のためにも みなさん
わたしをやさしく裁いてください

(思潮社「エミリィ・ディキンソンを読む」岩田典子 より)

これは、エミリィが最も多い366篇の作品を書いた1862年の詩です。アマーストは州都ボストンから西にバスで3時間ほど行ったところで、北緯42.23度、西経72.31度にあります。緯度では、北海道の室蘭とほぼ同じで、冬にはマイナス20度になることもあり、伸ばした自分の手の先がみえないほどの吹雪の日もあります。そんな1月、エミリィは温かい台所の窓ガラスに止まっている蠅を見つけ、狂喜して詩に書きます。また春を待ちかねて雪を掘ってみると、雪の下には若草が小さな頭をもたげていることに自然の素晴らしさと偉大さを見出します。自然のやさしさと厳しさは表裏一体であり、「やさしく 威厳をもって 自然は 語りかけてくれる」のです。